

# 近代浦賀における商家経営とその変容

— 東浦賀・米穀問屋美川家を中心として —

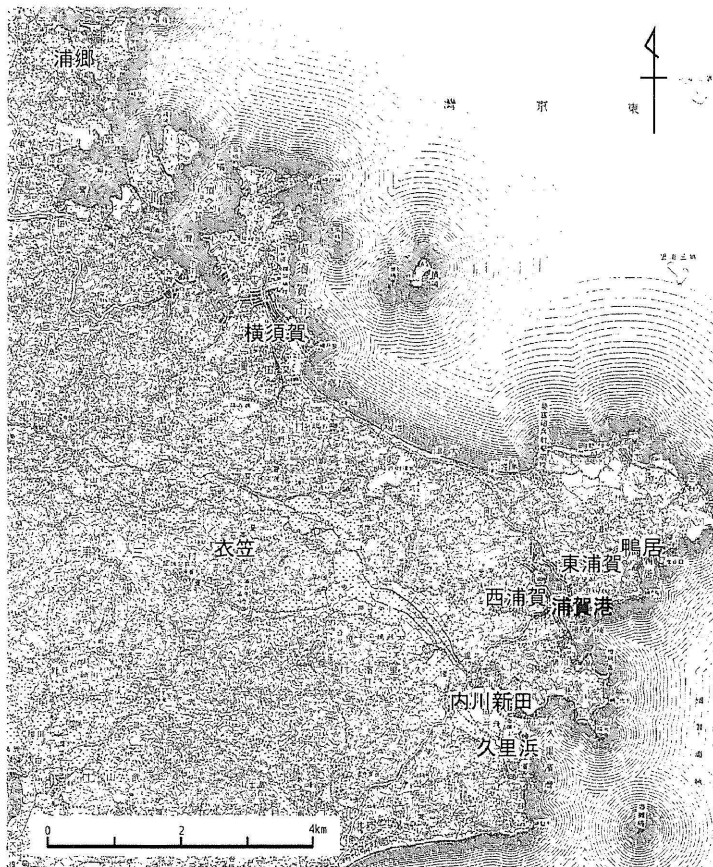
加藤 晴美

## I 研究の目的

本稿の目的は、近代における浦賀の商業活動の変遷を、東浦賀の米穀問屋である美川家を中心として明らかにすることである。

浦賀湊は、房総半島で生産される干鰯を関西方面へ移出するための中継地として発展した地域であり、享保5年（1720）の浦賀奉行所設置以後

は、江戸湾へ入港する廻船の船改めを行う海運の拠点として機能してきた（第1図）。これまでに、干鰯取引を独占した東浦賀については菊地<sup>1)</sup>や古田<sup>2)</sup>をはじめとする多くの研究が蓄積されてきた。しかしながら、これらの関心は主に干鰯の集荷圏と出荷圏、あるいは後に干鰯取引に参入した江戸問屋との係争に向けられており、西浦賀も含む浦賀の港町としての景観やそこに暮らす人々の



第1図 研究対象地域  
(陸軍測量部参謀本部発行明治36年5万分の1地形図「横浜」より作成)

生活像についての検討は十分ではなかった。

これを受け、筆者らは西浦賀を中心としてその開発過程や、近世以降の港町としての景観と機能を検討した<sup>3)</sup>。この中では、これまであまり検討されてこなかった明治期以降における浦賀湊の変容と、浦賀商人の動向に着目した。その結果、明治5年(1872)に浦賀番所は廃止されたが、その後も浦賀は明治20年代半ばまで全国市場における海運の重要拠点としての役割を果たしたことを指摘した。また、近世以来の浦賀商人は近代以降も浦賀町政をリードすると同時に、その商業的活動から生まれた利潤を明治29年(1896)設立の浦賀ドック建設や浦賀銀行の設立などへ向けていったことが明らかになった。

海運の重要拠点としての浦賀港の機能は明治30年代半ばを画期として大きく縮小していき、同時に近世から続く豪商らの倒産や他出が相次いだ。その一方、前稿では業種を転換させたり、経営を多角化したりして、この変化に対応していく商家の存在についても言及した。その一例として吉村は、廻船業を営む西浦賀宮下町の宮井清左衛門家が明治後期以降、浦賀ドック向けのセメントの運搬や他家の塩輸送へと経営を転換していき、その結果として浦賀の中心的な商家としての地位を維持し続けたことを指摘した<sup>4)</sup>。

浦賀港自体も、大正期には浦賀ドックへの原材料供給を主目的とした工業港としての性格を強めていた。浦賀では大正期以降も依然として活発な商業活動が展開していたが、これは主に三浦半島を中心とする近隣地域における物資の集散地としての意味合いが強く、すでに全国市場における流通拠点としての地位は失われていた。かわって、荒巻地区を中心として浦賀ドックの労働者などを顧客とした商店街が形成されるなど、しだいにドックへの経済的な依存度が高まっていったことが明らかになった<sup>5)</sup>。

しかしながら前回の報告では、浦賀が商業港としての機能を失っていった要因については明らかにできず、鉄道輸送への転換による流通構造の変容を可能性として指摘したのみであった。このた

め、具体的な商家の経営動向から、近代的な輸送体系の確立が浦賀商人にどのような影響を及ぼしたのか、考察する必要がある。

また、軍港都市として近代以降急速に発展した横須賀の存在にも着目したい。双木・藤野<sup>6)</sup>は、主に土地所有に注目して横須賀の都市化の過程を論じ、横須賀の都市化には他地域からの移入者が大きな役割を果たしたことを指摘した。明治期以降、横須賀に土地を取得し、商店を出店した移入者の中には浦賀出身の商人なども含まれていた。軍港都市の形成にともなう人口増加は米穀をはじめとする各種商品の需要を増大させたはずであり、この新たな市場に浦賀商人がどのように対応したのか、検討していくことをもう一つの目的とする。

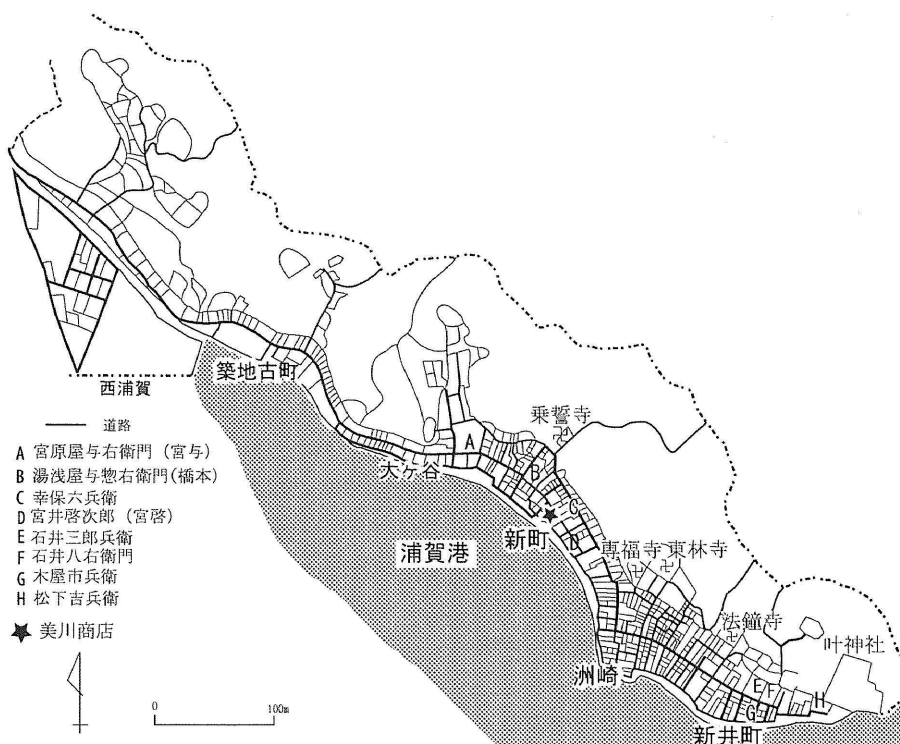
本稿ではⅡにおいて、明治期における東浦賀の商業の状況を検討し、明治期以降の流通ルートの再編の中で、浦賀の商家がどういった影響を受けたのか概観する。続くⅢでは、米穀問屋美川家の史料をもとに、浦賀の商家が近代においてどのように経営を展開させたのか、特に鉄道輸送との関連から具体的に検討する。

## Ⅱ 明治期における東浦賀の商業

本章では、まず事例とする美川家が位置していた東浦賀の景観と商業の展開について、主に明治初期から明治後期・大正期にかけての変容を概観しておきたい。

### 1) 東浦賀の景観

浦賀村は当初1村であったが、元禄5年(1692)に東岸と西岸で2つの藩政村に分割され、東浦賀村及び西浦賀村が成立した。東浦賀には築地古町・大ヶ谷・新町・洲崎・新井町の5つの字がみられる。宅地は村南部の新井町から湾奥の築地古町まで道に沿って延びており、町屋の背後には崖がせまっていた(第2図)。東浦賀村の鎮守は元禄5年の東浦賀村成立時に西浦賀の叶神社を勧請して創建されたともいわれる東叶神社であ



第2図 東浦賀の地割と干鰯問屋の所在  
 (浦賀文化センター所蔵「地押図」, 聞き取りにより作成)  
 注) 美川商店の位置は「土地台帳」により推定。その他の各商家の位置は宮井新一氏のご教示による。

る。岬の突端部に位置する東叶神社の背後にある標高50m程度の山は明神山、あるいは城山とも呼ばれ、戦国期に後北条氏の水軍の拠点となった浦賀城が存在した。中世期、三浦半島一帯は三浦氏によって支配されていたが、三浦氏は永正13年(1516)に後北条氏の侵攻によって滅亡し、これ以後、浦賀も後北条氏の支配下に入った。浦賀城は江戸湾対岸に位置する房州里見氏の水軍への備えとして築かれたとされる。城の建設時期は不明であるが、浦賀城の城下にあたる新井町の法鐘寺は明応2年(1493)、洲崎の専福寺は永正元年(1504)、東林寺は大永3年(1523)の創建とされていることから、15世紀末から16世紀初期に築城された可能性がある。

明神山の麓にあたる新井町付近には比較的整った広い区画がいくつかみられ、ここには江戸期に

東浦賀村の名主を務めた石井三郎兵衛家や石井八右衛門家が居を構えていた。前述の通り、東浦賀は戦国時代末期より、関東から関西方面へ輸送される干鰯の中継点となり、多くの干鰯問屋が現れた。石井三郎兵衛家及び石井八右衛門家は干鰯問屋でもあり、寛永19年(1642)に干鰯問屋株を初めて取得した干鰯問屋の「元祖」とされる15名の中にその名が見えている<sup>7)</sup>。この2名と同様、寛永期に株を取得した木屋市兵衛も新井町に存在していることから、浦賀城の麓から開発が進展したことが推測できる。

一方で、比較的新しく、江戸中期以降に問屋株を取得した干鰯問屋はより湾奥に近い新町や大ヶ谷に多い。大ヶ谷には他と比較して目立つ大きな区画がみられるが、ここは宝暦10年(1760)に干鰯問屋株を取得し、東浦賀の代表格ともいえる豪

商となった宮原屋与右衛門（宮与）の地所であった。宮与は初代が元禄期に紀州有田から縁戚の者とともに前出の干鰯問屋・石井三郎兵衛家に奉公に上がり、寛延2年（1749）ごろに独立したことが始まりであるという。また、幸保六兵衛（干鰯問屋株取得は享保期）や宮原屋利兵衛（同・宝暦6年（1756））など、宮与と同様に江戸中期以降に干鰯問屋株を取得した2名も新町に居を構えていた。浦賀の風俗や伝承をまとめた文化期の記録である「浦賀事跡考<sup>8)</sup>」にも「東浦賀も古へは新井町にて大家十四・五軒、洲崎に七・八軒、新町に四・五軒、大ヶ谷には更になし。今は之に反す」とあり、東浦賀は岬の突端部にあたる浦賀城周辺からしだいに湾奥へと町屋を拡大させていったと推測される。

幕末期には、明治期以降に陸軍駐屯地として利用された湾の最奥部には干鰯蔵が立ち並び、干鰯の取引を行なった市もここに立ったといわれている<sup>9)</sup>。しかし東浦賀の干鰯商いは江戸問屋の参入によって、元禄期をピークとしてしだいに減少し、幕末期には休廃業する干鰯問屋が増加した。その一方で、享保5年（1720）に西浦賀に浦賀奉行所が設置され、船改めが開始された。これにより、東浦賀の商人の中にも江戸に廻米を行なった各藩の穀宿や船手御用などを務める者があらわれた<sup>10)</sup>。干鰯取引の規模は江戸中後期には縮小していたとはいえ、東浦賀商人も西浦賀商人と同様、東北地方の太平洋岸や伊勢湾方面などから廻漕されてくる商荷物を扱い、活発な商業活動を幕末期まで維持していたと考えられる。

## 2) 明治初年における商業活動

明治3年（1870）に浦賀奉行所へ提出された東浦賀の「村高家数職業書上<sup>11)</sup>」からは、各戸の職業や構成人数などを知ることができる。集落の背後に崖が迫り、宅地用地の確保が比較的困難であったと思われる東浦賀の総戸数は546軒であり、同時期における西浦賀の戸数1,016軒の約半数であった。主だった商人の数も、東浦賀は上通り商人8軒、中通り商人21軒、下通り商人49軒であ

り、西浦賀の上通り商人17軒、中通り商人48軒の半数以下である。

「村高家数職業書上」には上通り商人と中通り商人及び下通り商人のうち数名の居所や名前、業種、家内の人数などが記載されている。第1表はこれを町別にして、商人の名と上・中・下通り商人の区別、業種を示したものである。近世期には西浦賀では認められず、東浦賀が独占していた干鰯を扱う商家は、この時点で19軒の存在が確認できる。10軒が確認できる附船小宿とは、入船する船の船員の身の回りの世話や問屋との取引の仲介などの業務を行った商家である。また、荷揚げされた商荷物を扱う水揚仲買は22軒確認できる。これら仲買の取扱品目に着目すると、米・塩・雑穀・酒などが多いことがわかる。そのほか米や雑穀・塩・荒物・茶などの日用品を販売する小売商、大工などの職人や煮染船売など、多様な業種がみられる。これらは1軒の商家が複数の業種を兼ねている場合がほとんどであり、特に干鰯問屋として記載のある商家は、ほぼ全てが米をはじめとする諸品の水揚仲買を行っていた。このように、東浦賀には西浦賀と同様、水揚商人や附船小宿といった、浦賀湊に入津する商荷物を扱う港町としての機能の中核をなす商人や、これらの人々の生活を支える小売商や職人などが存在したことがわかる。

これらの商人の中には、他地域に拠点を置く廻船からもたらされる物資の中継業務だけでなく、自身の持船によって商荷物の輸送を行なう廻船問屋を兼ねるようになっていた者もあった。第2表は明治6年（1873）における東浦賀の船数を示したものであり、東浦賀に船籍を置く廻船が11艘あったことが確認される<sup>12)</sup>。廻船の船主をみると、前出の干鰯問屋宮井与右衛門が4艘、次いで前田清五郎と佐久間権兵衛が2艘、鈴木善次郎、桐ヶ谷与右衛門、宮井次兵衛が1艘ずつ船を所有していたことがわかる。これらの廻船は最大のもので800石積であったが、そのほかの多くの廻船は300石から400石積程度の小型廻船であった。

史料中には、佐久間権兵衛の所有する廻船・比

第1表 東浦賀における主な商家とその業種（明治3年）

町	名前	屋号	区分	業種				
				干鯛問屋	船附小宿	水揚仲買	小売	その他
新井町	吉左衛門	伊豆屋 木屋	上	○	○	酒・米・雑穀・塩・諸品	米・雑穀・塩・荒物	
	辰五郎		上	○		米・雑穀・塩・諸品		
	庄三郎		中			諸品		
	助左衛門		中		○	材木板類・諸品		
	彦八		中	○		諸品		
	市兵衛		中	○		諸品		
孫右衛門	中			○				
洲崎町	忠三郎		中	○		諸品	荒物	
	太七		中		○	諸品		
	庄太郎		中		○			
	六兵衛		中	○		米・雑穀		
	弥治右衛門		中下			米・雑穀		
新町	利兵衛	宮原屋	上	○		米・雑穀・諸品	米・雑穀・荒物 米・塩・雑穀・荒物 米・雑穀・荒物	御番所附問屋
	清兵衛	宮原屋	上	○	○	米・雑穀・諸品		
	権兵衛	南部屋	上	○	○	米・雑穀・諸品		
	徳三郎		上	○	○	米・雑穀・諸品		
	勘兵衛		中	○		米・雑穀・諸品		
	太四郎	宮原屋	中	○		米・雑穀・塩		
	与左衛門		中	○				
	源蔵		中					
	半七		中					
	新助		中	○		雑穀		
大ヶ谷町	与右衛門	宮原屋	上	○		米・雑穀・塩・諸品	米・薪・雑穀・荒物 太物 紙 茶 米・雑穀・荒物	帳面職 煮染船壳  質屋渡世 大工職 大工職 菓子
	与八	山田	中		○			
	七郎左衛門		中	○		米・雑穀		
	吉三郎		中		○	諸品		
	伊勢次郎		中					
	庄兵衛		中					
	弥惣右衛門		中下					
	勝五郎	宮原屋	下					
	金蔵		下					
	清七		下	○		米・雑穀・塩・諸品		
	次兵衛		下					
	七郎左衛門		下	○				
	与右衛門		下					
	甚太郎		下					
	安五郎		下					
勘左衛門	下							
藤七		下						
弥兵衛		下						
五兵衛		下						
吉三郎		下	○		米・雑穀・諸品			
庄助		下						
築地町	善蔵		中			材木板類		

(石井三郎家文書「東浦賀村高職業書上」により作成)

沙門丸が「松前へ罷越未帰船不仕候」との記載がある。これは明治初年に浦賀商人が北海道松前との取引を行っていたことをうかがわせ、興味深い。浦賀と北海道との関連については、すでに東

浦賀の宮原屋次兵衛ら4名、西浦賀の江戸屋六兵衛ら4名の有力商人が神奈川県より「通商商社頭取並、北海道産物掛」に任命されたことが指摘されている<sup>13)</sup>。比沙門丸の所持者佐久間権兵衛とは南部屋権兵衛と思われるが、南部屋権兵衛もこの「北海道産物掛」の1人であった。また、湯浅屋の屋号をもつ干鯛問屋橋本家では、明治10年代半ばに函館からメ粕や鯨粕などの魚肥、鮭・鱒・昆布・鮪などの海産物などを移入していた記録があることから、おそらく比沙門丸も北海道産の海産物などを買付け、浦賀へと廻漕していたのであろう。浦賀では、北前船による日本海廻りの輸送が主であった北海道との取引は統計上に現れるほど重要なものではなく、またいつごろまで継続していたかも明らかではない。しかしこの時期、浦賀商人が魚肥や海産物の産地としてさらなる流通の拡大が期待される北海道交易に関心をもっていたことは、新たな市場動向に敏感に対応しようとする動きを示すものといえる。

第2表 東浦賀における船の保有状況（明治6年）

船種	氏名	船名	乗員数 (人)	石数 (石)	税金 (円)
廻船	宮井与右衛門	福宮丸	6	299	2.99
		福聚丸	8	369	3.69
		受福丸	13	643	6.43
		輪宝丸	10	465	4.65
	鈴木善次郎	宝吉丸	9	420	4.20
	桐ヶ谷与右衛門	喜福丸	7	332	3.32
	宮井次兵衛	安栄丸	5	212	2.12
	前田清五郎	伊豊丸	13	810	8.10
		宝生丸	10	671	6.71
	佐久間権兵衛	比沙門丸	—	—	—
若運丸		—	—	—	
五大力船	角井卯兵衛	子日丸	4	132	1.32
	石渡兵吉	開運丸	4	132	1.32
		神喜丸	3	142	1.42
	浦島源五郎	八幡丸	3	142	1.42
	石渡源五郎	嘉吉丸	3	74	0.74
	栗生太四郎	栄運丸	4	74	0.74
	斉藤仙之助	不動丸	3	141	1.42
	石渡与兵衛	明力丸	3	141	1.42
	白浜平四郎	宝来丸	3	141	1.42
	栗生利兵衛	扇生丸	4	132	1.32
	西岡与吉	福寿丸	4	141	1.41
	中尾甚七	妙見丸	3	83	0.83
	石渡伝次郎	稲荷丸	4	83	0.83
	秋元三郎左衛門	天神丸	3	74	0.74
浦島源五郎	妙見丸	3	83	0.83	
押送り船	桐ヶ谷藤吉	出精丸	3	83	0.83
	西岡与吉	徳寿丸	3	74	0.74
	西沢長七	伊勢丸	3	74	0.74
	天野勝五郎	明通丸	3	83	0.83
	飯倉清吉	金比羅丸	3	83	0.83
	宿浦九兵衛	不動丸	3	—	1.36
	長島長右衛門	明神丸	3	—	1.36

(石井三郎兵衛家文書「船税御検査控」により作成)

注1) 史料には漁船及び伝馬船の記載もあるが、ここでは省略した。

注2) 佐久間権兵衛所有の比沙門丸は「松前へ罷越未帰船不仕候」とある。

注3) 表中の一は史料に記載がないことを示す。

廻船のほか、東浦賀では100石から140石積の五大力船と、80石積前後の押送り船が各11艘ずつ、小・中規模の商人と思われる人々によって所有されていた。これらの船はいずれも主に江戸湾内とその近隣地域における海上輸送に利用された小型の地廻り船であった。押送り船は五大力船よりもさらに小型で船足が速く、主に鮮魚など鮮度が求められる物資を輸送するのに使用された。

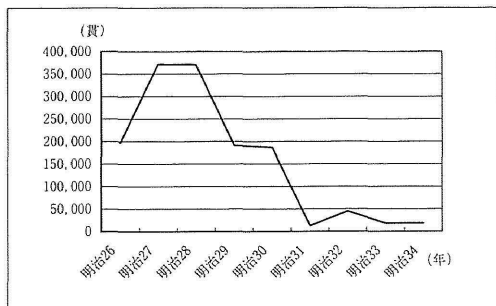
吉村は西浦賀の宮井清左衛門家（万屋・万清）が安政期に五大力船を所有するようになり、江戸湾近隣地域からの商品輸送を行っていたことを述べた<sup>14)</sup>。宮井家はその後、明治10年代に愛知県知多郡の廻漕業者から廻船を購入し、尾州廻船のルートを踏襲して塩輸送を行なうようになった。このように問屋・仲買としての物資中継業務にとどまらず、自ら船を所有する廻船商人へ経営を変化させていこうとする状況は、宮井清左衛門家だけの特徴ではなく、幕末期から明治期における東西浦賀商人に共通する傾向であったと思われる。

### 3) 明治後期・大正期における商業活動

次に、明治後期・大正期における浦賀港の機能の変化と、それともなう商業活動の変容を主に東浦賀を中心に確認しておきたい。

前稿において、筆者は大正初期には浦賀港の移入品の中心は浦賀ドックへ供給されたと思われる鋼板や銅管、亜鉛などの金属類であり、浦賀港が工業港として変化していたことを指摘した<sup>15)</sup>。米や塩、酒なども引き続き移入されているものの、その数量はわずかであり、大正初期には浦賀港はすでに全国的規模では海運の拠点としての地位を失っていたことが読み取れる。

ここでは、干鰯（鰯肥料）の明治中期以降における移入量の変化についてみてみたい。第3図は『神奈川県統計書』に記載のある明治26年（1893）から36年（1903）までの浦賀港への干鰯移入量の推移を示したものである。ただし、『神奈川県統計書』には鰯メ粕など他の鰯肥料についての記載がないため、この統計中の干鰯の項目の中には干鰯以外の鰯肥料も含まれている可能性がある。これによれば、浦賀への鰯肥料の移入量は、明治26年には約20万貫、明治27年（1894）には37万貫であり、明治中期にはある程度の鰯肥料が移入されていたことがわかる。しかし、その後の鰯肥料移入量の減少は顕著であり、明治32年（1899）には4万5千貫、明治33年（1900）には約1万8千貫にまで急速に減少した。一般的に明治期以降、北海道産鰯メ粕を中心とした鰯肥が鰯肥料の生産量を上回るようになり、さらに明治後期以降には人



第3図 浦賀港への干鰯移入量の推移  
（『神奈川県統計書』により作成）

造肥料や大豆粕の消費量が増大していったとされている。一方、魚肥は人造肥料や大豆粕の消費量の急増の中でも昭和初期まである程度の需要は維持していったとの指摘もある<sup>16)</sup>。しかしその流通ルートは大きく変化し、明治中期以降、魚肥を産地から直接買付け、鉄道によって直送する肥料商が増加し、その結果として魚肥は従来の中継港を経ることなく、東京・大阪などの集散地市場や消費地に直接もたらされるようになったという<sup>17)</sup>。

この影響は、かつては鰯肥料の中継地であった東浦賀の干鰯問屋の経営にも及んだ。明治初期には干鰯問屋は19軒確認されたが、明治31年（1898）の『大日本商工人名録<sup>18)</sup>』によれば、「肥料商」とされているのは宮井与右衛門と「米穀商兼肥料商運送業」の臼井儀兵衛（大黒屋）の2名のみであった。その臼井儀兵衛も、明治後期には業績が悪化し、明治39年（1906）には倒産して浦賀を去ったという。さらに大正4年（1915）の『浦賀案内記<sup>19)</sup>』（以下、『案内記』と表記）で確認できる肥料商は上記の宮井与右衛門と、東浦賀新町の宮井啓次郎の2名のみであった。このうち、宮井与右衛門の広告には「海陸産肥料・米穀・醤油・炭販売」とあり、さらに「過燐酸完全肥料 大日本人造肥料会社特約店」を掲げている。一般に過燐酸肥料は特約店制度を軸として販路を拡大していったとされており、大日本人造肥料会社もこのような特約店を設けた人造肥料の有力メーカーの一つであった。

宮井啓次郎（宮啓）は『案内記』に掲載された広告によれば、肥料は人造肥料を中心に扱っており、そのほかに石蠟、洗濯石鹼なども販売し、日本生命保険株式会社の代理店も兼ねていたことがわかる。また、この時期の宮啓の当主は千葉県安房郡北条町の造醤油屋から養子にはいった人物であり<sup>20)</sup>、宮啓は当主の生家が製造した醤油（銘柄は「末広」）の特約店となっていた。このように、明治初年には19軒が確認された肥料商（干鰯問屋）は、大正初期には2軒にまで減少した。しかもこれらの肥料商は商品の中心を流通量が大きく減少した魚肥から人造肥料などへ移し、人造肥料

会社の特約店や保険会社の代理店となるなど、近代的な企業との接触をはかることによって、この時期の経営を維持していたことがうかがえる。

明治初年に営業していた干鰯問屋の中には、魚肥取引の不調によって、他の商品へ重点を移した商家もみられる。なかでも前出の干鰯問屋・橋本家（湯浅屋）は、明治10年代には北海道や北陸などから魚肥や海産物などを移入していたが、明治中期には薬種商に転じ、薬種のほか荒物、砂糖などを東京方面から移入し、地域の顧客へと販売するようになったとされる<sup>21)</sup>。そのほか、明治初期の干鰯問屋の中では、樋口家と幸保家が米穀問屋に転じたことが『案内記』より確認できる。一方、明治初年には有力な問屋であった木屋市兵衛、南部屋権兵衛などは『案内記』には記載がなく、大正期まで経営を維持していたかは不明である。すなわち、明治期以降における流通ルートの再編や干鰯取引の低調の影響を受け、浦賀商人は全国規模での物資の中継業務から、近隣地域の需要を満たすための取引に重点を移していったものと思われる。

一方、『案内記』によれば芝生地区の土木工事請負業・秋元政吉と大ヶ谷の米・酒・味噌・醤油等販売の山下為吉は「陸軍重砲兵射撃学校御用商」となっている。横須賀海軍の御用商人の多くは横須賀中心部に集中していたが、浦賀の中にも横須賀に設置された軍事関係施設とのつながりを持っていた商家があることがわかる。そのほか、明治期には横須賀へ店舗を出店したり、横須賀に本拠を移したりする商人もあらわれた。その代表格ともいえるのが西浦賀宮下にあった呉服商・岡本伝兵衛（雑賀屋）である。雑賀屋は享保期には西浦賀に店を構えていたと伝えられているが、明治5年（1872）、横須賀元町へ進出して呉服店を開き、後に百貨店へと成長した。そのほか、幕末期に信濃から浦賀に移住し、書籍や文房具などの販売を行っていた西浦賀田中町の山本佐兵衛（信濃屋書店）は大正10年（1921）ごろ横須賀中心部に支店を出した<sup>22)</sup>。また、西浦賀宮下の茶商・鹿目家では昭和戦前期に当主が横須賀市議会議員を

務めており、横須賀とのつながりを深めていたことがうかがえる。

また、双木・藤野が検討したように、明治期以降に浦賀から横須賀中心部へ移住して、土地を取得する商人も現れた。これらの商人らは横須賀で米穀等の小売や、呉服商、不動産業などを営んだ<sup>23)</sup>。ただし、双木・藤野が横須賀へ進出した浦賀出身者として挙げた商人は、近世期には中堅規模の小売商であった商人や、幕末期以降に成長したと思われる新興商人、浦賀の中でも湊に面した商業的中心地ではなく、その周辺地域の農村部に本拠をもっていた商人らがほとんどである。一方で、享保期前後に浦賀に定着し、水揚問屋などを営んで浦賀湊の中核をなしていた有力商人が横須賀中心部へ進出した事例は少ない。明治以降に横須賀を志向した商人らの多くは、浦賀の近世以来の有力商人と比較して浦賀に強固な商業的基盤を有しておらず、それゆえに軍港都市として人口が増加し、中心地としての機能を高めていた横須賀への移転を積極的に進めたのではないかと推測される。

### Ⅲ 米穀問屋美川家の経営とその変化

#### 1) 美川家の概要

ここでは事例として取り上げる美川家とその史料についての概要を述べたい。美川家は東浦賀新町に店を構えた米穀問屋である。（第2回参照）。美川家の来歴等については不明な点も多いが、近世期には三河（美川）屋六右衛門を名乗っていたものと思われる。しかしながら、東浦賀の有力商人が名を連ねた干鰯問屋の中にその名はなく、前出の「有米取調帳」にも米穀保有量の多い商人の中に美川家は登場しない。これらの事実から、美川家の経営規模は幕末期においてはさほど大きくはなく、中堅程度の商家であつたらうと想像される。明治31年（1898）の『大日本商工人名録<sup>24)</sup>』によれば、美川家は「米穀卸・酒商 三河屋 三河六右衛門」として記載されている。その後、明治44年（1911）に合名会社としての登記を行



い<sup>25)</sup>、大正期の『案内記』には「米穀問屋 合名会社 美川商店」として登場している。『案内記』に掲載された美川家の広告は1ページをそのまま使用した大きなものであり、合名会社へ変更していることから、中堅商家であった美川家が明治期以降に経営を拡大させていったことがうかがわれる。また、昭和11年(1936)の『横須賀商工案内<sup>26)</sup>』には横須賀汐留にも美川商店(美川鹿治郎)の名が確認できることから、昭和期までには美川商店が浦賀から横須賀に進出し、店舗を構えるようになったことがわかる。

現在、美川家に関する文書史料は横須賀市自然・人文博物館に所蔵されており、経営に関わる史料は明治初期から大正期にかけての約180点が存在している。美川家文書には明治初期の「諸色売揚帳」や明治20年代の「大福帳」等の帳簿類のほか、荷物の送り状、明治末期から大正初年において、美川家が取引先に送付した書簡の写しなどが含まれている。

前章でみたように、近世期における海上輸送の重要拠点であった浦賀湊は、明治5年(1872)の船番所廃止、鉄道輸送の台頭による市場再編、鱒肥料取引の衰退などの影響を受け、大きく変容していくことになった。このような流通体系の変化に、浦賀湊において米穀を扱う問屋であった美川家がどのように対応し、経営のあり方を変化させていったのか、浦賀商人の経営変遷の一例として検討する。この際、主に明治初年と明治末期における美川家の史料を主に分析の対象とする。

## 2) 明治初期における美川家の経営

### a. 史料の概要

ここでは明治6年(1873)の「諸色売揚帳<sup>27)</sup>」(以下、「売揚帳」と表記)から、明治初年における美川家の経営内容について検討する。美川家の「売揚帳」は明治6年10月からの美川家の各商品の購入・販売を記録した史料である。「売揚帳」には荷の仕入れと販売の記録が記されており、美川家におけるおおよその商取引の内容を把握することが可能であると考えられる。なお、浦賀では明治5

年に浦賀番所と船改めが廃止されている。検討の対象とする「売揚帳」は番所廃止の翌年にあたる明治6年のものであり、番所廃止直後の浦賀湊における商取引の一端をうかがうことのできる史料としても興味深い。

まず「売揚帳」の史料としての形式をみていきたい。「売揚帳」は雑穀・米・煙草など、取扱う商品の品目ごとに分けて記載されている。取引の日付は明記されていないが、1回の仕入れごとに取引の内容が記され、それに買入れた商品の販売の記録が続き、最後にその取引の損益を記している。さらに仕入れについては仕入先の商人名や購入品の内容・数量・購入価格が、販売については販売先の商人名・数量・販売価格が記載されている。

美川家が取扱う商品は、米を中心として大豆、小麦、麻、酒、蠟燭などであった。これらの品は近世期においても浦賀湊へ各地から廻漕されてきていた荷物であった。「売揚帳」に記載された取引の過半数以上が米に関するもので占められており、米が美川家の取引の中心であったと考えられる。幕末期の浦賀湊において米穀は最も重要な商荷物の一つであった。近世浦賀の商人は諸藩の廻米に携わり、廻米の荷揚げや保管、江戸への廻漕を担当する穀宿を務める者もあった。特に東北地方太平洋岸の諸藩<sup>28)</sup>や駿河湾・伊勢湾方面、瀬戸内沿岸の諸藩とのつながりが強かった。こうした領主米だけではなく、商人や農民らによって廻漕される米も多く扱われていたと考えられる。また、「売揚帳」において、米に次いで記載が多いのは大豆であった。大豆は浦賀では米に次ぐ主要な商荷物の一つであり、近世後期においては主に南部・仙台・岩城・相馬領などの東北地方及び関東農村から移入され、浦賀を経由して駿河・伊勢・近畿地方などへ再輸送されていた。

### b. 仕入先商人と取扱商品

次に、取引相手の商人についてみていく。第3表は美川家における米及び大豆の仕入先のうち、合計100俵以上を取引した商人を示したものであ

る。美川家の米の仕入先はほとんどが浦賀の商家であり、特に西浦賀の松崎屋与兵衛が取引件数、数量ともに突出している。松崎屋は西浦賀浜町に居を構える水揚問屋であり、西浦賀でも有数の有力商人であった。そのほか、取引件数の多い西浦賀の商人としては、阿波屋甚右衛門・江戸屋六兵衛・大黒屋儀兵衛が挙げられる。幕末期には浦賀の商人は一番組から六番組までの番組に統制されていたが、美川家の主要な米の仕入先である松崎屋や阿波屋・江戸屋・大黒屋などは、主に一番組に編成された商人らであった。この一番組は商家の中でも有力な問屋で構成されており、浦賀に揚げられる商荷物の価格統制にも関わり、荷をもたらす廻船とそれを買入れる仲買商との仲介を行っていた。

次いで取引が多いのは阿波屋甚右衛門である。

第3表 美川家の取引先別の米・大豆購入量  
(明治6年)

所在	購入元名	米		大豆	
		件数	俵数(俵)	件数	俵数(俵)
西浦賀	松崎屋与兵衛	57	4,276		
	阿波屋甚右衛門	17	587	7	1,445
	江戸屋六兵衛	11	658		
	川津屋又四郎	5	185		
	大黒屋儀兵衛	2	60	2	600
	加渡屋亀蔵			1	215
東浦賀	宮原屋清兵衛	6	375		
	木屋市兵衛	3	300		
	秋元三郎左衛門	2	125	1	50
	山田吉三郎			2	386
	桐ヶ谷与左衛門	1	100		
	師崎屋与八			1	1,404
廻船	扇生丸甚蔵	6	843		
その他	内川砂村善六	1	60		
不明	久■里や清吉	4	318		
	栗村半七	1	200		
	下川半右衛門			1	200

(美川家文書「諸色売揚帳」により作成)

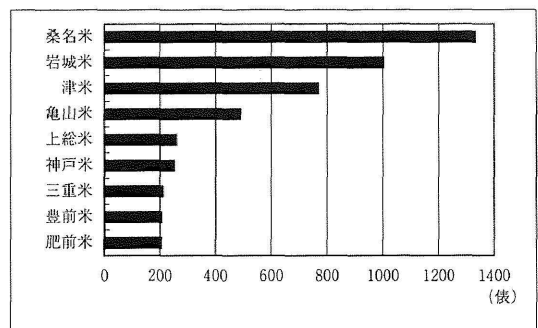
注1) 基本的に購入した俵数が合計100俵以上のもののみ示した。

注2) 商人の所在は「大日本商工人名録」及び現地調査による。

美川家は米・大豆などのほかに麻の取引も行っていたが、美川家が扱う麻は全て阿波屋甚右衛門から買入っていた。阿波屋甚右衛門は阿波徳島藩の穀宿を務めた商家であり<sup>29)</sup>、阿波との取引が活発であったらしく、美川家が阿波屋から購入した麻は全て阿波麻であった。また、東浦賀における取引相手としては、やはり浦賀の有力な問屋であり、干鰯問屋でもあった宮原屋清兵衛や木屋市兵衛の名がみえる。

そのほか、廻船の船頭と推測される扇生丸甚蔵という人物とも取引しており、問屋を介さずに直接廻船からの買入れも行っていたことがわかる。扇生丸から買入れた米はほとんどが岩城米であることから、扇生丸は東北方面からの荷の廻漕を担う廻船であったと推測される。また、取引相手の中には内川砂村善六の名がみえる。内川新田は砂村新左衛門によって万治3年(1660)から久里浜において開発された新田であり、後に善六組と与兵衛組に分割された。数量としては少ないものの、各地から浦賀に廻漕される米のほか、美川家ではこういった地元の産米も取り扱っていたことがわかる。

第4図は「売揚帳」に記載された米の数量を、産地別に検討したものである。美川家は仲買商としての役割をもっていたと考えられるため、荷物がどこから浦賀へと送られたものであるかは史料からは知ることができないが、取り扱う米の銘柄からこれを推測することは可能である。



第4図 美川家における米の産地別取扱量 (明治6年)

(美川家文書「諸色売揚帳」により作成)

産地別にみた場合、もっとも取扱数量が多いのは桑名米であり、そのほかにも津米や亀山米といった伊勢方面の産米が多いことがわかる。天保5年(1834)浦賀商人の米保有数を示した「有米取調帳」においても、勢州米はもっとも保有量が多い銘柄であった<sup>30)</sup>。浦賀は伊勢に隣接する尾張に本拠を置く内海船や常滑船など、尾州廻船と呼ばれる新興海運業者らとのつながりが深いため、これらの廻船によって伊勢米が浦賀にもたらされたものと考えられる。

伊勢方面からの米に次ぎ、数量が多いのは岩城米であり、東北地方からの米が多量に移入されていたことをうかがわせる。明治初年に至っても、伊勢方面や東北地方の産米が多くもたらされていることは、船番所廃止後のこの時期にもいまだ江戸後期以降の流通ルートがおおむね維持されていたことを示している。第4図では産地のみ表示したが、津や亀山からの米はそのほとんどが蔵米とされており、諸藩が持ち込む蔵米の取引が明治初年に依然として盛んであったことが推測できる。

そのほか、伊勢方面、東北地方の産米より数量的には少ないものの、豊前米や肥前米など、九州地方で産出される米も扱っていることが確認できる。これらの九州地方の産米は全て松崎屋与兵衛から買入れていた。そのほか数量としてはごくわずかであり、取引も単発的なものであるが、前述の内川新田の新田米や三崎米など、地元産米も買入れている。

一方、大豆は口切大豆や免大豆などと表記され、産地が不明なものが大半を占めている。産地が判明するものでは、南部大豆や八戸大豆など東北地方産のものや相州大豆などを買入れており、米と同様、大豆についても幕末期と共通した輸送ルートが踏襲されていたと思われる。

### c. 販売先

浦賀商人らから買入れた荷は、第4表に示す商家へとさらに販売された。販売先の多くは浦賀の商人と考えられるが、仲買商という美川家の性質から、最終的にそれがどこで消費されたのかまで

はわからない。所在が判明する販売先の商家は東浦賀では干鰯問屋でもある小川藤左衛門・宮原屋清兵衛・宮原屋与右衛門や、そのほか宮原屋太四郎、師崎屋与八などの名がみえる。西浦賀では野間屋太兵衛・大黒屋儀兵衛がいる。これらの商家は浦賀湊における商業的機能の中心であった、港に面した町場に居住していた商人らである。そのほか東浦賀の背後の台地上に位置し、百姓が多数居住していた鴨居地区や、明治初年までは湿地が

第4表 美川家の取引先別の米・大豆販売量 (明治6年)

所在	販売先名	米		大豆	
		件数	俵数(俵)	件数	俵数(俵)
東浦賀	小川藤左衛門	12	16		
	石井九郎兵衛	10	9		
	師崎屋与八	9	357		
	宮原屋清兵衛	7	250	7	737
	宮原屋太四郎	4	130		
	宮原屋与右衛門	1	150		
西浦賀	笠屋長兵衛	15	108		
	野間屋太兵衛	4	195		
	大黒屋儀兵衛	3	92	2	525
荒巻	松崎屋与兵衛			15	1,589
	上坂屋清五郎	36	565		
鴨居	飯田清九郎	12	377		
不明	八百屋定吉	50	437		
	岩城久右衛門	30	253		
	長谷川治郎八	24	169		
	石渡喜右衛門	13	73		
	加渡屋善兵衛	12	58		
	上総屋吉之助	12	11		
	鈴木国蔵	10	10		
	仲吉新助	10	10		
	加渡屋亀蔵	6	293		
	■木屋鉄五郎	6	235		
	龍崎新右衛門	5	72		
	江口屋伝七	5	61		
	久■里や清吉	3	170		
	三浦屋八兵衛	3	68		
	津の国屋長助	3	62	2	44
湊屋卯兵衛	2	80			
前田清兵衛	1	100	1	100	
扇屋伊八			1	200	

(美川家文書「諸色売揚帳」により作成)

多く、農村的な景観を呈していた浦賀湾奥部の荒巻地区の商人にも米などが販売されている。鴨居の飯田清九郎は前出の『大日本商工人名録<sup>31)</sup>』によれば「米穀商兼酒醬油油荒物商」、荒巻の上坂屋清五郎は「酒商兼砂糖米荒物薪炭商」となっており、これらは小売商であると考えられる。そのほか、第4表に示したとおり、美川家の米・大豆の販売先にはその所在が不明な商人も多い。これらの商人との取引数量をみていくと、1回当たりの販売数量が1俵から10俵以下の場合が多い。そのため、これらはおそらく浦賀湾周辺の小規模な小売商を相手とした取引であったと思われる。このようにして美川家が販売した米などは、問屋へと販売されたものは江戸もしくは他地方へとさらに廻漕され、浦賀湾周辺の小売商へと販売されたものは近隣地域において消費されたと推測される。

以上のように、明治初年の美川家では浦賀の有力な水揚問屋を介して商荷物を仕入れ、さらに他の問屋や浦賀近隣の小売商へと販売していた。取引先や商荷物の流通ルートなどから判断する限り、おおむね幕末期における取引関係が踏襲されていたと推測される。

### 3) 明治末期における美川家の経営変化

#### a. 史料の概要

次に、明治末期の「端書複写控帳<sup>32)</sup>」から、近代における美川家の経営の変遷を、浦賀商人による横須賀進出の意味や鉄道輸送による経営への影響などを中心に検討したい。

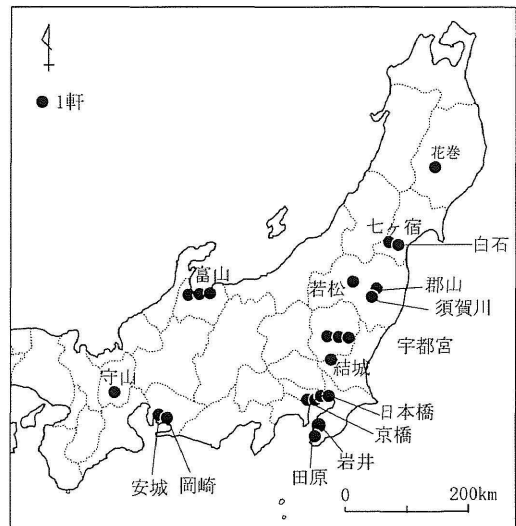
先述のように美川家には、美川家から取引先等に送付された葉書をカーボン紙によって写しとったものをまとめた「端書複写控帳」が残されている。この葉書の中には私信のほか、仕入先への発注依頼や市場動向を知らせるもの、販売先への入荷案内や御用伺いなどが含まれている。取引の数量や価格等、美川家の経営を数字として把握することはできないが、後述するように取引先との交渉の詳細や荷物の輸送方法の変化などを検討することが可能であり、明治末期における美川家の取引内容と経営努力をうかがわせる貴重な史料であ

る。ここでは主に明治44年(1911)11月15日から大正元年(1912)8月20日に至る約9ヶ月間に美川家から送付された葉書の綴りである「端書複写控帳」にみられる取引内容の分析を行いたい。

#### b. 取引先の分布

まず、荷の仕入れ先の分布を第5図からみていきたい。第5図は「端書複写控帳」に綴られた葉書のうち、商品の発注やそれに関わる内容が記された葉書の送付先商店の所在地を示したものである。この時期の美川家の米の仕入れ先は、東北地方では岩手県(花巻)・宮城県(白石・七ヶ宿)・福島県(郡山・若松・須賀川)、関東地方では栃木県(宇都宮)・茨城県(結城)といった北関東や東京湾岸の日本橋・京橋、千葉県(岩井)・田原などに存在した。そのほか、愛知県(岡崎・安城)などの三河地域や、北陸地方では富山県に取引先が分布している。これらの取引先に対して送られた葉書の多くは荷の発注依頼であり、この時期の美川家では浦賀港へ移入された商品を仕入れるだけでなく、各地の米生産地の商家から直接買付けを行うようになっていたことがわかる。

三河地域の岡崎や安城、東京湾岸などは近世後



第5図 美川家の米仕入先商店の分布(明治44・大正元年)  
(美川家文書「端書複写控帳」により作成)

期の浦賀にも大量の物資を送り出していた地域であり、これらの地域との取引はある程度旧来の地域間関係を引き継いだものであると推測できる。ただし、従来の取引関係とは直接結びつかない、新たな地域とのつながりも確認できる。例えば、美川家は富山市内においては仁右衛門町の小川安太郎、同新川原町の廣野吉兵衛、同山王町の江本力作の3名と取引しており、これらの商人から富山県における最大の移出品であった米を購入していた。また、栃木県宇都宮市においては小谷野竹次郎（押切町）と福田新吉（小袋町）の2名から白米を買入れている。そのほか、この時期に美川家が発注している米の銘柄には、秋田米や若松米・越中米・栃木米といったように、明治初年には取り扱いのなかった銘柄が多く含まれており、流通ルートが明治初年からは大きく変化していることを推測させる。

一方、東京日本橋・京橋の米穀商からも米を仕入れていた。この場合、葉書で発注が確認できるのは、品質の良さで知られる肥後米などであった。統計上でも大正3年（1914）には浦賀港への東京からの船舶による米移入量は8,240俵にのぼっており、千葉からの6,084俵、愛知からの1,295俵を大きく上回っている<sup>33)</sup>。

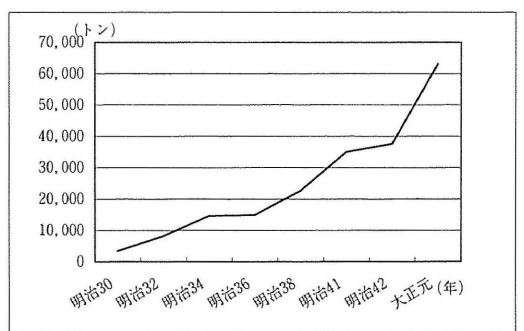
明治後期における米穀市場については、鉄道普及などの影響を受けて、米の大消費地であり集散地でもある、東京・大阪に代表される大都市へ向けた産地からの米直送が増加していたとの指摘がある<sup>34)</sup>。東京市場に集積された米が近隣地域を後背地とする物資の中継点となった浦賀へ移入され、その後周辺地域へ再輸送されるという新たな流通構造が生まれていたことが考えられる。

c. 輸送方法の変化

前述の通り、明治期以降には汽船の登場や鉄道の敷設により、物資の流通構造は大きく変化した。石井は全国的な鉄道網が形成されていく明治20年代からしだいに鉄道輸送量は増加し、明治末期以降には全国的な物資の輸送体系の中心は海上輸送から相対的に運賃の安価な鉄道輸送へと転換

していったと指摘している<sup>35)</sup>。三浦半島方面へは明治22年（1889）に大船駅から横須賀駅までに横須賀線が開通しており、東京から横須賀まで鉄道による貨物輸送が可能になった。『神奈川県統計書』においても明治30年（1897）から横須賀駅への鉄道による貨物移入量が記載されるようになった（第6図）。このうち鉄道による移入量をみていくと、明治30年には3千トン程度であったが、明治32年（1899）には1万トンを超し、明治41年（1908）には3万トン、大正元年には6万トンに及んでおり、明治後期の15年間に急増していたことがわかる。『神奈川県統計書』には浦賀港への総移入量が記載されていないため、海運による移入量との単純な比較はできない。しかし、少なくとも明治30年代から大正初年にかけての時期に、横須賀駅への物資の鉄道輸送が急激に増加し、横須賀周辺地域への物資移入における鉄道の役割が増大していたことが確認できる。昭和5年（1930）に刊行された「浦賀町勢要覧<sup>36)</sup>」では浦賀港について「鉄道ノ施設完備シ東海道鉄道ノ開通アリテヨリ当港ハ漸次ノ衰退ニ傾キ明治二十七年二十八年頃ハ最モ其ノ極度ニ達」したとあり、鉄道開通と浦賀港への物資移入の減少が大きく関連していたことがうかがえる。こうした輸送体系の転換との関連に着目して、「端書複写控帳」に綴られた葉書にみられる、美川家の経営における物資の輸送方法を検討したい。

まず、東京湾沿岸地域と浦賀間の輸送について

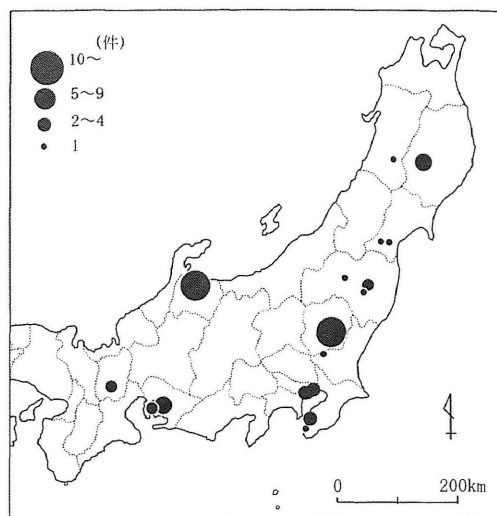


第6図 横須賀駅への鉄道貨物移入量の推移（『神奈川県統計書』により作成）

みてみたい。浦賀美川商店から東京日本橋の山野井商店に宛てた葉書には「御約定ノ白米私船御積入ノ由御通被下度、入船日々出待居候」とあり、日本橋からの米輸送には船が利用されていたことがわかる。明治45年2月2日に房州田原村（現富津市）の鈴木竹次郎に当てた葉書には「白米壹百俵浦賀宛五升式合銭にて正々御約定申上候。成べく私船積こし御送被下度願上候」と記されている。明治末期においても東京湾沿岸地域間の輸送は、海上輸送が活発であり、美川家でも購入した物資の輸送に船を利用していた。東京－浦賀間には三浦共立運輸などによって汽船の定期便も運行されていたが、史料中に「私船」とあることから、美川家では自家の持船によって海上輸送を行っていたと思われる。

しかしながら、こうした海上輸送に加え、美川家では物資の鉄道輸送の割合がしだいに高まってきたことがうかがえる。明治末期の美川家は、従来取引のなかった北陸地方や関東内陸部に新たな仕入先を開拓していたことは前述の通りである。葉書の送付件数から見た場合、特に富山や宇都宮への発注依頼が多く、これらの新たな地域との取引が活発になっていることが読み取れる。（第7図）。

この背景には全国的な鉄道輸送網の発達があったと考えられる。北陸方面へは明治32年（1899）に北陸本線が米原駅から富山駅まで開通している<sup>37)</sup>。北陸線開通によって北陸地方から関東・中部地方への魚肥や米の供給量が急激に増加したことはすでに阪口や村上によって指摘されている<sup>38)</sup>。また、石井は明治30年代後期には1万石程度であった鉄道による富山県からの米移出量が明治40年代に急増し、大正元年には10万石に達したことを指摘した<sup>39)</sup>。浦賀では近世期には北陸地方との取引はほとんどみられなかったが、美川家では鉄道整備を契機として、米の有力産地である富山県との取引を開始したと思われる。栃木県では明治後期において、鉄道輸送の展開によって台頭してきた越後米や三陸米と競合するため、農会が主導して、耕地整理や新たな農法の導入などの農



第7図 美川家の米仕入先への葉書送付件数  
（明治44・大正元年）  
（美川家文書「端書複写控帳」により作成）

事改良に着手し、米の品質向上と商品化が進行していた<sup>40)</sup>。鉄道輸送への転換は輸送コストや輸送日数の短縮などのメリットがあったと思われるが、これに加えて、従来は取引のなかった米の有力産地や新興の米産地と、新たに取引を結ぶことを可能にした。

これに次いで書簡の送付数が多いのは岩手県や福島県、愛知県などである。これらのうち、鉄道輸送との関連に着目した場合、東北地方の仕入先商店が主に内陸部の鉄道沿線に分布していることが指摘できる。東京から仙台・盛岡・八戸などを経て青森へ至る東北本線は明治24年（1891）に全通しており、美川家の取引先商店がみられる花巻や白石・郡山・須賀川はこの沿線に位置する。また東北本線沿線からは外れるが、若松も明治31年（1898）に開業した郡山から会津地方を経て新潟まで結ぶ岩越線（現磐越西線）の沿線に位置しており、これも鉄道輸送との関連が考えられる。

三河方面では愛知県岡崎に3軒、安城に1軒の取引先商店が存在した。このうち、美川家から三州岡崎町杉浦九市あてに送付された明治45年（1912）4月20日の書簡には、以下のように記されている。

拜啓 久し振りにて電照⊗白米参車八月参日来にて正々約定仕候。荷物ハ吾等経営スル横須賀駅前関東倉庫会社運送部次にて御■送被下度候（下略）

幕末期の浦賀に三河米がもたらされていたことは前出の「有米取調帳」によっても確認できる。三河は尾州廻船を有した尾張に隣接しており、元來はこれらの海運業者によってその産米を海上輸送していたと考えられる。しかしながら、上記の史料では岡崎の商人に対し横須賀駅前の関東倉庫会社運送部に送付することを求めており、近世期には海運による取引があったと思われる地域からの移入も、東海道線を利用した鉄道輸送に切り替えていることが推測される。

史料中にみえる関東倉庫会社は、『案内記』にも関東倉庫株式会社運送部として記載されている。『案内記』掲載の広告によれば、この会社は運送業・倉庫業・委託販売業・貸付業を行っており、横須賀停車場前にあったことがわかる。富山県や栃木県に宛てた書簡などにも関東倉庫会社宛に荷を送付するように指示する文言が散見されることから、美川家では産地から鉄道輸送された米穀を一旦この会社の管理する倉庫に保管し、その後販売していたことが推測できる。

史料にはこの倉庫会社に関して「吾等経営スル」と述べられており、詳細は不明であるものの、美川家が運送業や倉庫業の経営に参画するようになっていた可能性がある。これは、海上輸送から鉄道輸送による米取引へと経営をシフトさせていった美川家が、いかに鉄道輸送の有効性を重視していたかをうかがわせるものである。

前述のとおり、昭和11年（1936）の時点では美川家は横須賀汐留に店舗を構えていた。この横須賀移転、あるいは支店設置がいつごろ行なわれたかは明確ではないが、大正3年の『案内記』の美川家広告では横須賀店に関する記載がないことから、大正後期から昭和初年に行われたと推測される。横須賀から浦賀までは鉄道による貨物輸送は行われなかったことから、浦賀に本拠を置く美川

家では大正初期までは横須賀駅前の倉庫会社を鉄道によってもたらされる物資の管理に利用しており、その後鉄道輸送の比重が高まるにつれ、横須賀に店舗を置く必要にせまられたのではないかと推測される。

美川家が鉄道輸送を重視していたことは、明治45年5月に浦賀の美川家から東京向島に滞在していた美川六右衛門<sup>41)</sup>へ宛てた書簡からもうかがえる。この葉書には、「今度者千葉県夷隅郡二鉄道敷設相成ニ付、当地にて通運取引店ヲ認可して貴度（下略）」との文言がみられる。ここでいう鉄道とは、大正2年（1913）に夷隅郡大原から勝浦まで延伸された房総線（現外房線）のことと思われる。鉄道の開通に迅速に対応し、現地に通運取引店を確保しようとする美川家の動きが読み取れる。

このように、美川家の取引では、従来は海上輸送が中心であったと思われる地域についても、順次鉄道に切り替えていこうとする状況があった。このため明治末期の時点では、船舶による海上輸送は主に東京湾沿岸地域からの輸送に限定されつつあったと思われ、しだいに鉄道を介した産地からの直買方式への転換を進めていったであろうことが推測される。また、取引全体に占める鉄道輸送の割合が高まるにつれ、より鉄道輸送への対応に有利な横須賀での業務の重要性が高まり、倉庫会社の経営やその後の横須賀進出へとつながっていったと推測される。

以上のように、全国的な鉄道網の敷設を背景として、美川家では明治後期以降、産地の取引店の確保や横須賀における倉庫会社設置などをはかった。これらの動向は、美川家が鉄道輸送を利用した産地からの直送に重点を置いた新たな流通システムを構築しつつあった可能性を示唆している。前述のように近代における物資流通に関する先行研究では、明治後期以降、各地の卸商が従来の中継地を経由しない産地・消費地間の直送によって米や魚肥などを直接仕入れるようになり、流通ルートの再編が行なわれたことが指摘されている。美川家もこのような卸商と同様の経営形態を

展開させていたことが推測できる。大正末期から昭和初期に行なわれたと思われる美川家の横須賀進出も、浦賀港における米などの物資移入の減少と、鉄道輸送の利便性などが影響したのではないかと考えられる。

#### d. 販売先

次に、明治末期から大正初年における米販売先について検討してみたい。第8図には、「端書複写控」に含まれる、得意先と思われる商家への御用伺いや入荷案内などの送付先からみた、商品販売先の分布を示した。今回検討した書簡では美川家の米販売先と推測される商人は計12名確認できた。そのうち特に販売先商人が多いのは、まず浦賀に南接する久里浜であり、これに横須賀市内と衣笠が次いでいる。また、浦賀に近接した久比里や、近世期には港町としての機能も有していた浦郷にも取引先をもっていた。史料の性質上、葉書

にみえる取引先だけで単純に判断することはできないが、美川家では買入れた米をさらに再輸送するというよりも、横須賀近郊農村及び横須賀市内における需要に応える形で販売していたと思われる。また、図には示さなかったが、横須賀海軍の軍艦食卓長あてに受注した米が納品できなくなった旨を伝えた葉書もある。美川家は海軍へ食料品などを納める御用商人の中には含まれていないが、海軍とのかかわりも多少存在していたと思われる。

## VI おわりに

本稿では、主に明治期以降の東浦賀を中心として、近代における全国的な輸送体系やそれにとともなう流通構造の変容が、浦賀港の機能やそこで経営を展開する商家にどのような影響を与えたのかを検討した。



第8図 美川家の米販売先商店の分布（明治44・大正元年）  
（美川家文書「端書複写控帳」により作成）



東浦賀は戦国末期からの干鯛取引によって発展し、浦賀奉行所が設置された享保期以降には、西浦賀商人と同様、活発な商業活動を展開していた。明治初年においても干鯛問屋や附船小宿、水揚商人など、湊町としての物資中継機能を支える商人らの存在が確認された。しかしながら、前稿でも指摘した通り、明治30年代半ばより浦賀への商荷物の移入は減少した。これはこの時期に鉄道敷設による輸送体系や流通構造の再編によって、浦賀を経由せずとも産地から消費地へ物資を直送することが可能な新たな流通ルートが成立したことが大きな要因であると思われる。事実、横須賀線横須賀駅への鉄道輸送による貨物移入量は、明治30年代以降急激に増加しており、鉄道輸送の重要性が増していたことが推測される。東浦賀の重要な取扱品であった鯛肥料も、鯨肥や人造肥料の流通量増加にともなって浦賀での移出入量が大きく減少し、旧来の干鯛問屋の中には人造肥料や米穀、薬種などを中心とする経営へと転換したり、横須賀に進出して軍関係の御用商人となったりして経営の維持をはかっていく事例がみられた。浦賀港の商業港としての機能縮小にともない、有力商家の中には倒産し他出するものも現れるなど、経営を維持できなくなる商家も存在した。

しかしながら、浦賀商人のなかには、人口増加が著しく、市場の拡大が顕著な横須賀への進出をはかり、経営を拡大していく者も現れた。横須賀に進出した浦賀商人の来歴に着目すると、幕末期以降に成長した商人や近世期においては中堅規模の小売商であった者などが多く、必ずしも浦賀に強固な基盤を持っていたとは言えない商人が中心となっていたことがうかがえる。

本稿において検討した東浦賀の美川家も、幕末期には中堅規模の商家であったと推測され、近代以降に横須賀を志向して経営を拡大させていった浦賀商人の事例と位置づけられる。本稿では廻船による商荷物の移入量減少後、美川家が海上輸送よりむしろ鉄道輸送を中核とした新たな流通ルートを積極的に開拓していこうとしていたことが指摘できた。明治末期における美川家の経営の特質

としては、次のことが明らかになった。

まず、美川家では明治初年に行われていた、浦賀に輸送されてきた物資を有力な浦賀商人から買い取り、他の問屋や小売商へ販売するという従来の取引を行なうだけでなく、北陸や北関東、東北内陸部などに独自の取引先を開拓し、産地からの直送を行なうようになっていた。東京、千葉など東京湾沿岸との取引では美川家は自家の持船を利用した海上輸送を行っていたが、東北や北陸をはじめとする遠隔地の仕入先商店の多くは鉄道沿線上に位置していた。これらの取引先には北陸地方などそれまで浦賀との取引があまりみられなかった地域も多く、鉄道網の敷設が新たな流通ルートの構築に大きな役割を果たしていたことが推測される。この時期には、各地の問屋の中には従来の物資中継地を経由せず、汽船や鉄道などを利用した産地直買へと経営を転換させるものが増加していたとされている。美川家もこうした新たな輸送体系と流通システムを積極的に経営に取り入れることで、浦賀港の縮小以降も経営の拡大を図っていくことが可能であった。

また、美川家は東浦賀のほか、横須賀駅前に位置して輸送された商品の保管を行なったと思われる倉庫会社の経営にも参画していたと推測される。前述のとおり、軍港都市として発展する横須賀での需要拡大を見込んで、横須賀へ本拠を移したり、支店を置いたりする商家がみられた。しかし美川家にとって横須賀への進出は、横須賀市内における物資の需要に応えるというだけでなく、鉄道による横須賀駅への物資輸送に対応するためという意味を持っていたと推測した。

このように、美川家では明治中期以降に浦賀港での取引が縮小し没落する近世以来の有力商人が現れた後も、鉄道輸送による独自の流通ルートの構築につとめ、その結果経営を拡大していった。ただし、今回の報告は美川家の膨大な史料群のうち、限られた史料の分析にとどまっているため、いまだ美川家の経営内容の全貌を明らかにしたとは言い難い。今後、帳簿類や書簡などをあわせて検討を行い、美川家の経営における海上輸送と鉄

道輸送による商取引の比重の変遷なども含め、考察していく必要があると思われる。また、こうした海運から鉄道輸送へという新たな流通ルートの開拓は果たして浦賀商人の全体的な動向であったのか、美川家が例外的なものであるのかという、浦賀における美川家の経営動向の位置づけも、これからの課題としたい。

## 付 記

本稿の作成にあたり横須賀市自然・人文博物館学芸員の安池尋幸先生には、史料の閲覧などの便宜をはかっていただいたほか、調査全般にわたり、貴重なご助言をいただきました。また、浦賀における現地調査では山本詔一氏、宮井新一氏、浦賀文化センターの皆様から多くのご教示を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

## 注および参考文献

- 1) 菊地利夫 (1958) : 江戸干鰯問屋と浦賀干鰯問屋の集荷圏の係争, 政治地理, 4, 251~264。
- 2) 古田悦造 (1985) : 近世相模国浦賀における干鰯問屋の集荷圏と出荷圏, 地理学評論, 645~673。
- 3) 加藤晴美・千鳥絵里 (2006) : 浦賀湊の景観及び機能とその変容, 歴史地理学調査報告, 12, 63~91。
- 4) 吉村雅美 (2006) : 明治期西浦賀における問屋の経営の変遷—宮井家と清喜丸の航海を中心として—, 歴史地理学調査報告, 12, 93~112。
- 5) 市村真実 (2006) : 浦賀の発展における浦賀ドックの意味, 歴史地理学調査報告, 12, 113~132。
- 6) 双木俊介・藤野 翔 (2009) : 軍港都市横須賀の形成と土地所有の変遷, 歴史地理学野外研究, 13, 1~23。
- 7) 明治3年「株式取調書」, 横須賀市編・発行 (2007) : 『新横須賀市史 資料編 近現代Ⅰ』所収。
- 8) 年不詳「浦賀事跡考」, 『浦賀案内記』所収。
- 9) 宮井新一氏の御教示による。
- 10) 例えば、穀宿では松下吉兵衛 (盛岡藩), 加茂屋勘兵衛 (尾張藩・佐竹藩), 樋口屋吉左衛門 (桑名藩・相良藩), 宮原屋清兵衛 (八戸藩), 伊豆屋彦八 (新宮藩) などが挙げられる。
- 11) 横須賀史学研究会編 (1987) : 『相州三浦郡東浦賀村石井三郎兵衛家文書第三巻』, 横須賀市図書館, 101~109。
- 12) 横須賀史学研究会編 (1987) : 『相州三浦郡東浦賀村石井三郎兵衛家文書第三巻』, 横須賀市図書館, 140ページ。
- 13) 大豆生田 稔 (2003) : 北海道産物会所と浦賀商人—北海道立文書館所蔵『開拓史公文録』から—, 市史研究横須賀, 2, 71~81。
- 14) 前掲4), 98~99。
- 15) 前掲3), 82~85。
- 16) 阪口 誠 (2000) : 明治後期~第一次世界大戦期における川越地方の肥料市場, 社会経済史学, 66-3, 45~63。阪口は明治後期から大正末期までの魚肥 (鰯・鯨肥料) の供給量の変化を統計資料から検討し, 明治から大正初年にかけてその供給量が落ち込むものの, その後4~7トン程度で推移し, 昭和期にはいると, 再び10万トン以上に回復すると指摘した。
- 17) 例えば, これまでに愛知県知多郡の万三商店 (a. 村上はつ (1986) : 知多雑穀肥料商業の展開—万三商店を中心に—, 山口和雄・石井寛治編『近代日本の商品流通』, 東京大学出版) や大阪府貝塚の廣海家 (b. 石井寛治他編 (2006) : 『産業化と商家経営』, 名古屋大学出版), 川越の伊藤家の事例 (c. 前掲16) などが報告されており, これらの肥料商が明治後期以降, 産地で直接肥料を買いつけ, 鉄道などを利用した遠隔地取引を行なうようになったことが示された。
- 18) 渋谷隆一編 (1988) : 『都道府県別資産家地主総覧 神奈川県』, 日本図書センター, 111~114。
- 19) 神奈川県三浦郡浦賀町立尋常高等浦賀小学校内職員懇話会編 (1914) : 『浦賀案内記』, 信濃屋書店。
- 20) 宮井新一氏の御教示による。宮井啓次郎は干鰯問屋であった宮原屋利兵衛家 (宮利) を相続したとされる。
- 21) 横須賀市編・発行 (2007) : 『新横須賀市史 資料編 近現代Ⅰ』, 274ページ。
- 22) 山本詔一氏の御教示による。
- 23) 本報告書の双木・藤野報告第6表を参照。
- 24) 前掲18)。
- 25) 横須賀市自然・人文博物館所蔵美川家文書, 明治44年「合名会社への変更通知書」。
- 26) 横須賀市自然・人文博物館所蔵, 『横須賀商工案内』。
- 27) 横須賀市自然・人文博物館所蔵美川家文書, 明治6年「諸色賣揚帳」。
- 28) 東浦賀商人は盛岡藩・一関藩・中村藩・二本松藩・会津藩・泉藩などの穀宿を勤めた。
- 29) 「東西浦賀用達穀宿船手用名前書上」, 横須賀市編・発行 (2005) : 『新横須賀市史 資料編 近現代Ⅱ』, 604

- ～606。
- 30) 前掲4), 94～96。
  - 31) 前掲18)。
  - 32) 横須賀市自然・人文博物館所蔵美川家文書, 明治44年・大正元年「端書複写控帳」。
  - 33) 前掲19)。
  - 34) 山口和雄・石井寛治他編 (1986):『近代日本の商品流通』, 東京大学出版, 26～30。
  - 35) 前掲34)。
  - 36) 横須賀市図書館所蔵, 「浦賀町勢要覧」。
  - 37) ただし北陸本線が直江津駅まで全通するのは大正2年 (1913) である。
  - 38) 前掲16), 17) a。富山県は伏木港を移入港として北海道産魚肥の集散地として発展した。
  - 39) 前掲17) b, 140ページ。
  - 40) 笛木 隆 (1997): 南河内町の産業と社会, 南河内町編・発行『南河内町史通史編 近現代』。
  - 41) この美川六右衛門は, 美川家の先代当主と思われる。この書簡は向島の「大貫様方」宛となっているが, これ以前には東京日本橋の病院宛に六右衛門への業務連絡などの書簡が複数送付されている。おそらく六右衛門が病後の療養のため, 一時的に滞在したものと思われる。